

地域のおいしい良心市

思いやりの
心に感謝！

特集



高知県に根強く残る、良心市の文化

道

路沿いの小さな小屋の中に並べられた採れたての農作物の数々。「良心市」と呼ばれる無人販売所は、町内の至るところに存在しています。国内で農作物の無人販売所が広まったのは1970年代と言われていますが、高知県では戦前からお遍路さん向けの無人販売所が存在していたとされています。『高知県百科事典』（高知新聞社、1976年）によると、「良心市」という名称は旧東津野村で使用していた名称で、当時は地域によって「出し売り」や「ダンマリ」など、いろいろな名称で呼ばれていたようです。今回の特集では、町内に数多くある「良心市」を巡り、そこでお会いできた“店主”の方々にお話を聞いてみました。



甲把 麻由子 さん（七里甲）

日君が書いた
メッセージ



自分たちが食べて、 おいしいと思ったものを。

今年の2月から「良心市」を始めたという甲把さん。家庭菜園で採れた野菜がおいしくて、そのおいしさを少しでも地域の方々に届けられたらという想いで始めたそうです。知り合いの大工さんが作ってくれたという小屋の横には、車から目立つようにホワイトボードを設置していて、毎日メッセージを書いているんだとか。

「今日は息子の日(はる)が、中学校に行く前に書いていました(笑)」

心打たれるメッセージにも注目です。



親子の優しさも詰まった農作物

4人兄弟の次男で、窪川中学校に通う日(はる)君。小さいときから畑仕事のお手伝いをしていて、「良心市」もよく手伝っているそうです。スイーツを作って七里小学校のときの担任の先生に持っていくこともあるという日君。「良心市」に並ぶ農作物にも、甲把さん親子のあたたかい優しさが詰まっています。

少しでも喜んでもらえたら

農薬を使わないとか、どうやったらお客さんに喜んでもらえるかということもいつも考えているという甲把さん。「おいしいものを自分たちだけではなく、少しでもお客さんに食べてもらいたい」と話してくれました。





河野 尚美さん（勝賀野）

「絶対向いちゅうと思うで！」という声がきっかけに



近所のピーマン農家さんのバイトをしていたとき、「畑仕事、絶対向いちゅうと思うで！良心市とかやってみたら？」と声をかけてもらったことがきっかけで、昨年8月から「良心市」を始めたという河野さん。小屋は米奥の大工さんが作ってくれたとのこと。今は朝5時に起きて畑に行き、7時までには「良心市」に出している河野さん。甲把麻由子さんとはお友達でもあり、同じものを出すときは値段の相談をすることもある「良心市」仲間でもあるそうです。

小屋を気にかけてくれることがうれしい

料金箱の隣には「お手紙ノート」を置いていて、そのノートに小学生がよくお手紙を書いてくれるんだとか。「野菜がおいしかったとか、雨が降ってずぶ濡れになったとかも書いてくれて、交換日記みたいにもなっています（笑）」という河野さん。「次は何が出るが？」と話しかけてくれる方もいるそうで、「お客さんが小屋を気にかけてくれることが一番うれしいです」と、楽しそうな笑顔で話してくれました。



公式noteで
発信中！

まだまだたくさん！四万十町の良心市



四万十町の良心市を巡ってみた。野菜も
メダカも並ぶ、地域に根付く無人販売所
文化

♡ 51

四万十町公式note
2026年7月3日 12:00

今回の特集で取材した場所以外にも、町内にはまだまだたくさんの「良心市」が存在します。四万十町公式noteでは、町内の「良心市」を巡ってみた様子を公開していますので、そちらもぜひご覧になってみてください。今回の特集では、その記事の一部をご紹介します。



四万十町 良心市



四万十町公式note



メダカまで売っている？！

四万十町で見つけた個性派良心市

近づいてみると、並んでいたのはなんと「野菜」ではなく「メダカ」。きれいな水の中に悠々と泳ぐメダカたちが500円～1,000円ほどで販売されていました。



「モデルしちゃうか？」そう声をかけてくださったのは、四万十町出身だというお父さん。トラックを停めて立ち寄り、慣れた様子でメダカを購入されていきました。(続きは四万十町公式noteで！)